

Title	近代國際政治史(占部百太郎著, 高原書店發行)
Sub Title	
Author	伊藤, 政寛(Ito, Masahiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.153(733)- 155(735)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0154">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0154</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評

## 増訂 近世外交史 上巻 (林毅陸著) 新版 洲 (一誠社發行)

内外共に、外交史の研究がなほ頗る幼稚であつて、將來歴史の一分科として之を獨立させ得るかどうかも疑はれてゐた頃に於て、既にこの新分野に注目して研究を進められた我が林先生の外交史は、その上巻が夙に一九〇八(明治四十一年)に刊行せられ、斯學の尖端を驅進せるものであつた。爾來、四半世紀の間に於ける歐洲外交史の研究は、著しい進歩を遂げたのである。それにも拘らず、今日に於ても邦文でその全般に互つて記された歐洲外交史の良著は、僅かに二三を數ふるに過ぎない。且つ又本書の如く、流麗なる行文の間に、個人外交の面影を遺憾なく活躍せしめてゐるものは一つも存しないのである。長く生命を維持してゐる本書は正しく『邦文外交史のクラシック』であると言つても不都合はなかるべく、本書によつて教を受けたる我等には思出多き好記念碑でもある。

この上巻に於ては、第十八世紀の歐洲に於ける英露普の新膨脹、ポーランドの分割とトルコの衰微等に筆を始め、フランス革命及びナポレオンの時代に於ける對佛列國同盟關係及びウィーンナ公會、更に神聖同盟その他の反動外交、並に南米植民地、ギリシヤ、

ベルギーの獨立及びエジプトの半獨立に關する複雑なる外交關係の表裏が取扱はれ、列強折衝の跡を明かにし、その巧拙が批判せられ、イギリス外交の妙諦が謳歌せられてゐる。

初版以來新研究を加へて絶えず増訂せられ來つた最後の版と之を比較して見ると、新版に於ては固有名詞の用字法が現代的に稍改められた外、内容に於ては著しい變更が加へられたとは思はれないのであるが、その外形は全く一變し、紙質が改善せられた上に、活字をポイントに改め組方を變更し、それだけ頁數を減じて前著の五二〇頁から三七二頁に縮まり一段の進歩を示してゐる。私一個の希望としては、下巻の終に索引を加ふるか、細目次に頁數を附加して檢索の便を與へられたらばと思ふ。

世界の變局は今や著しく外交的色彩を帯び來つてゐる。今日位ヨーロッパ諸國の内政狀態が對外關係に左右せられ引摺られてゐることは稀である。又我國に於ても頻々として聞かれる『非常時』といふ言葉は、その滿洲國承認の——或は非承認の外交上の跡始末を意味するものに外ならない。我國の運命も亦たこの外交にかゝつてゐるのである。歴史の重點は外交史に移りつゝあるかの如き觀がある。外交史の知識と——又その常識を最も必要とするこの際に於て、我等はこの名著が重版せられたことを喜ぶと共に、更に増補が加へられんとする下巻の刊行の早からんことを祈るものである。定價三圓五十錢。(間崎万里)

## 近代國際政治史

(占部百太郎著)  
高原書店發行

我が國の史家にして近代又は近世の初めをフランス大革命に求めぬ者は少い、又近世國際政治史又は西洋最近世史などに類する書物は決して我が國に尠くはない。併し乍ら、フランス大革命より世界大戰終熄の現代に至る過去一世紀半に亙る歐洲國際政治變遷の跡を回顧せるは極めて稀有であつた。況んや想を練る事三十年、之に倦き足らず再度の留學により或はヨーロッパ方面近東方面に親しく戦後の實情を踏査し或は新奇の史料を求められ、尙又歸朝せられては最近刊の書物に迄研究の及び、然る上に上梓せられたる本書の如きは恐らく他に比肩すべきものがないであらう。

全卷七二頁、十七章。此の浩瀚なる著述の各章各節、我々後輩の啓發せられざるところなく、博士が決して單なる歴史家に非ざるを示す幾多の點が有る。

例へば、ルソーの「民約論」に就きフランスの複版に重大な誤謬ありといふ最近の發見を紹介されてゐる。即ち第一編第六章社會の總意を論じた節に *encomps* を *enore* と誤植し、而もそれが各國の版に其の儘誤譯され邦譯にも「一國として」とあるべきを「改めてもう一度」又は「其代りに吾々は」など見えてゐる（二一—二二頁）の如きは専門の政治思想史家と雖も氣付かずに居る者がある程である。

博士が英國憲政史の泰斗たるは衆知の事實であり、之に關聯する議論に傾聴すべきことの多きは喋々たるを要しないが、兩頭王國憲法・オーストリア部憲法・ホンガリア部憲法（三二五—三七頁）を詳述し、一八七五年のフランス憲法を論じてフランス大統領をイギリス國王とアメリカ大統領とに比較し（三四五頁）、又は頻繁

なるフランス内閣の更迭が必ずしも政變を意味せず（三六二—三三頁）とせられたるは、博士の憲政眼に俟つものであらう。

ウィーン公會に依り建設せられたるドイツ聯邦を述べらるゝや、各邦が何れも外交・軍事・内政の權力を有し乍ら聯邦の安全を脅す如き條約の締結を許されず又各邦が互に干戈を交へるに先立ち其の紛争の裁定を聯邦の國會に託すべしなど、同聯邦が國際聯盟に類似せる諸點を擧げられ（二〇—二一頁）、フランスの植民政策が日本及びドイツと同様、主として官吏や軍人の植民地であり肝腎の商工業者は多く海外に踏み出すことを好まぬ（三七—三九頁）と論ぜられたるは、古今東西に通曉せざる者の爲し得るところでなからう。

ロシア歴代の專制政治を以つてしても西ヨーロッパの思想が同國に傳播したのは、ロシア人の大部分たるスラヴ民族が著しく多感的で半歳の冬籠り中自然思索に耽り生活の困難から離脱せんとする理想に走り（五七—四頁）、改革家の或る者がテロリストとなつたのは、必ずしも彼等が墮落し流血を好めるが爲ではなく二百年の壓制から祖國を救済すべき他の方途なしと確信せるに基く（五八—五九頁）と心理的解剖を試みられ、然もマルクスの經濟學説は人間社會に於ける經濟的動機に餘り重きを重いたと均しく商品の價値に對して勞働の要素を過當に見積つた批難を免れず又小資本家階級の發達を無視してゐる（六一—四頁）として中道を示されたるは、通常の歴史書に見ないやうである。

フランス大百科辭典がチエンバー大百科辭典を大體翻譯したも  
のなるは現代の通説と言ふべく又福澤先生の西洋事情が多少チエ

ンパー大百科辭典に據つてゐることは先生自身も認めて居られる。即ちフランス大革命も我が維新も、均しくこの大辭典に負うところあるは偶然の一致である(二二二頁)。本塾の占部博士にして初めて到達し得べき至境であらう。

以上は全卷を埋むる珠玉のほんの一粒に過ぎない。若し夫れ事件の進展を裏書する挿話に至つては、ジロンド黨黒幕の領袖ローラン夫人が王妃に對する個人的惡感から共和政治の創設を企て(四二—三頁)、ナポレオン三世の皇后ユウゼニが皇帝を騙つて普佛戰爭を惹起せしめ(二七三頁)、マツヂニの著書に感奮せるボーディエラ家兄弟が志成らずして同志と共に銃殺されたが能く「青年イタリヤ」の意氣を示し(二二〇頁)、ピスマルクが一八九八年ハンブルグに於て近東を導火線にやがて世界大戰の勃發すべきを豫言した(五三九頁)物語の如き、新に奇たる事實は枚擧に遑なく、讀者をして覺えず一氣に全卷を讀了せしめずには措かない。従つて本書は只單に高等學校程度の教科書又は參考書としてのみならず、廣く世界の火勢を知らねばならぬ今日何人にも一讀を奨めたきものであり、三十五頁の索引付に到つては懇切の限りと言ふべきである。而して博士が他目を約束せられたる更に「深奥なる研究」が、一日も早く上梓せらるゝを鶴首する所以である。價、學生版六圓、上製七圓。(伊藤政寛)

支那のフランス西漸(後藤末雄著)  
第一書房刊行

書評

かつて、アンリー・ド・レニエ其の他フランス文學佳什の翻譯者として幽婉妍美の筆致を見せ、また新進作家として谷崎潤一郎氏と共に、大正改元當時の騷壇の華たりし後藤末雄氏が其の後十數年間に亘る全く學者としての潛思攷究の生活は、此に學位論文支那思想の西漸となつて榮譽ある成果を結んだのである。今また本書が近刊されたことは、氏を知るものにとつて二重の欣幸といはなければならぬ。

本書は序説、本論、結論を併せ六百頁以上に亘る浩瀚な論文である。先づ序説に於て、博士は支那の國民性、商工事情、首都の宏大、皇居の壯麗のみかは、支那の工藝美術、特に陶器、漆器、絹織物の製造狀況の方面をも紹介したかのマルコ・ポーロの「東邦見聞録」より筆を起して、支那と歐羅巴との接觸、支那と佛蘭西との接觸に就て略述されてゐる。

次に本論に於て、第一編佛國耶蘇會士の清朝に於ける活動と其の學術的業績の題下に、羅馬法王の佛國耶蘇會士支那差遣、ルイ十四世の佛國耶蘇會士支那差遣、康熙帝の西歐科學研究と「皇輿天覽圖」の測成、康熙帝と天主教の公許、「儀禮問題」と康熙帝の態度、雍正帝の禁教事情と其の眞因等に就て敘述されてゐる。

康熙帝が學問の熱愛者として、將又外來文明の研究者として歐洲に鳴り響くに至つた事情、西歐學僧がその科學上の功績により布教の便宜を得た事、又西歐人の康熙帝觀等を博士は敘べられてゐるが、寔に興味津々たるものがある。次にプーヴェ師の康熙帝觀を引用しよう。

この君主の精神的美質は肉體的美質よりも遙かに優れてゐる。